

# 多様な ESD の実践を通じての気づき

前田 剛

## 1. 2017 年度の多様な経験

立教大学 ESD 研究所（以下、研究所）と対馬市との ESD 研究連携において、以下の通り、2017 年度は実に多様な経験をさせていただいた。

①ESD 研究連携自治体間の現地研究会（2017 年 6 月、羅臼町）への参加、事例発表

②アクション・リサーチ（2017 年 8 月、対馬市）での学生受入

③写真ワークショップと地域創生（2017 年 9 月、対馬市）の開催

④国際シンポジウム「ESD による地域創生の可能性と今後の展開」

（2017 年 11 月、立教大学）への参加、事例発表

⑤対馬学フォーラム 2017（2017 年 12 月、対馬市）での ESD 成果発表

〈特別報告〉

対馬市立厳原北小学校「ツシマヤマネコを PR しよう」

対馬市立久田小学校「対馬 再発見～We love ふるさと～」

〈ポスター発表〉

野田研一・宮嶋康彦・笹川貴吏子：写真ワークショップと地域創生

浦谷哲治他（対馬高等学校）：「ESD 対馬学」による学習効果に関する考察

平山俊章（厳原小学校）：ESD からの授業改革—対馬の未来を支える人財の育成

畑島英史（豊小学校）：島嶼地域の人口減社会における教育の特徴

⑥ESD 人材養成事業研修会（2018 年 1 月、対馬市）の開催

⑤は対馬市主催、⑥は対馬市教育委員会主催事業であるが、阿部所長に助言をいただくだけでなく、日頃から ESD 推進校へサポートをいただく等、研究所に深く関与いただいた。

また、当市では、長崎県立対馬高等学校と連携し、⑦総合的学習「ESD 対馬学」を展開している。この学習に対しても阿部所長より助言をいただいた。

上記の取り組みを、区域や対象者、教育ステージから整理してみると、下表のように、多地域・多主体が ESD 研究連携事業に参画したことが分かる。

教育においては、教育ステージに応じた教育目標や取組み課題の設定、そしてカリキュラムの系統化が重要である。特に ESD がねらう真のグローバル人財、持続可能な社会の担い手育成のためには、人の生涯にわたり、ライフステージ・教育ステージごとに ESD の考えに則った教育活動が行われることが理想だ。今年度の取り組みを振り返ると、どの教育ステージにおいても、ESD を意識した教育活動が行われ、ESD を意識することで多様な実践ができたと実感している。また、それぞれの実践からは、ESD 推進上、多くの示唆や知見、課題が得られたのではないだろうか。得られた示唆や知見等の中で、特に筆者が注目した

点を以下の通り報告したい。

表 2017 年度 ESD 研究連携事業

区域	対象者	番号	教育ステージ
島内	小学校児童・教諭 中学校生徒・教諭	⑤⑥	初等教育
	高等学校生徒・教諭	⑤⑥⑦	中等教育
	一般市民	③⑤	社会教育/高等教育
国内	自治体関係者	①	社会教育/高等教育
	大学生・大学教員	②③⑤	社会教育/高等教育
海外・国内	ESD 関係者・大学生・大学教員・自治体関係者	④	社会教育/高等教育

## 2. 大学生の学び

現在、国内の学生数は約 280 万人で、7 割が 3 大都市圏の大学に在学する。その学生の多くが都市圏の生まれ育ちで、地方出身の学生も県庁所在地や市街地など都市部出身の学生が多数を占めている。

このような社会構造の変化の中、毎年、対馬で大学生を受入れてみて感じさせられるのは、「イメージとリアリティのギャップ拡大」と「専門分化された大学の学びの危うさ」である。

2016 年度、研究所のアクションリサーチとして 6 名の立教大学社会学部の学部生と社会学研究科の大学院生を受け入れた。そのうちの 2 名の学部生が、卒業論文研究と当市の学生実習への参加を兼ねて対馬に再来島した。また、1 名の大学院生が当市の短期実践合宿「島おこし実践塾」（以下、実践塾）と農林水産インターンで再来島した。アクションリサーチ（以下、AR）をきっかけに、対馬ファン・リピーターとして学生たちが再来島したのは、当市としてとても喜ばしいことであった。NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターの辻英之氏が「深い学びこそ、ファン・リピーターを生み出す」と主張する通りであるし、現地でのリアリティが、学生の大学での専門的学びをより深く具体的なものにするのであろう。

上記の再来島した学部生 2 名は、農林漁業者の「民泊」に注目し、自ら民泊に宿泊体験しヒアリングする中で、人が地域資源を保全し、ビジターとの関わりの中で誇り意識や保全意識を高めていることを対馬学フォーラムでのポスター発表や卒業論文で報告した。こうした報告は、自らが体験し観察することによって初めてできるものであろう。

2017 年度の実践塾は「生物多様性と農林漁業振興」を主題とするプログラムであった。実践塾において、原木しいたけの天地返しを体験した I さん（AR からのリポート院生）は、当初抱いていた農業イメージに対し、実際は、過酷で心が折れそうな地道な作業であることが印象深かったと語っている。

また、同じく立教大学の学部生で実践塾に参加した T さんは、「生物多様性に対して全く

興味がなく、生物多様性は生きもの好きの人たちが守るものと思っていた。しかし、生物多様性の保全は実は自分たちの暮らしを守ることであることを学んだ」と感想を述べている。

この2名の学生の感想は興味深い。というのは、当市は「対馬市域学連携地域づくり推進計画」において、「世界に先駆けた域学連携とESDの拠点として、多様な人々との交流と学び合いを推進し、グローバルな視野と行動力を持った人財を育む」ことを基本目標の1つとしているが、現場でのリアルな学びに加え、学生の関心や専攻と異なる分野の学びを提供する意義の深さを改めて感じたからである。大学での専門分化された高度な学びはもちろん大切であるが、逆に学生の視野や行動が狭められているのではなかろうか。グローバルな視野と行動力を持つ人財育成と、今喫緊の課題であるSDGsの達成のためには、「場の学び」(PBE)によって、複雑な社会構造を俯瞰し、自分自身の関心部分以外と他との関連性等の理解を促すことがますます求められよう。

参考まで、下の図は、実践塾生の感想を可視化したものである。上記の学びを提供する際には、単に場を創り、農林漁業体験などを提供するだけではなく、同世代の異なる価値観に触れながら学び合い、自己を振り返れるようなグループワークや共同生活を取り入れることが重要と思われる。

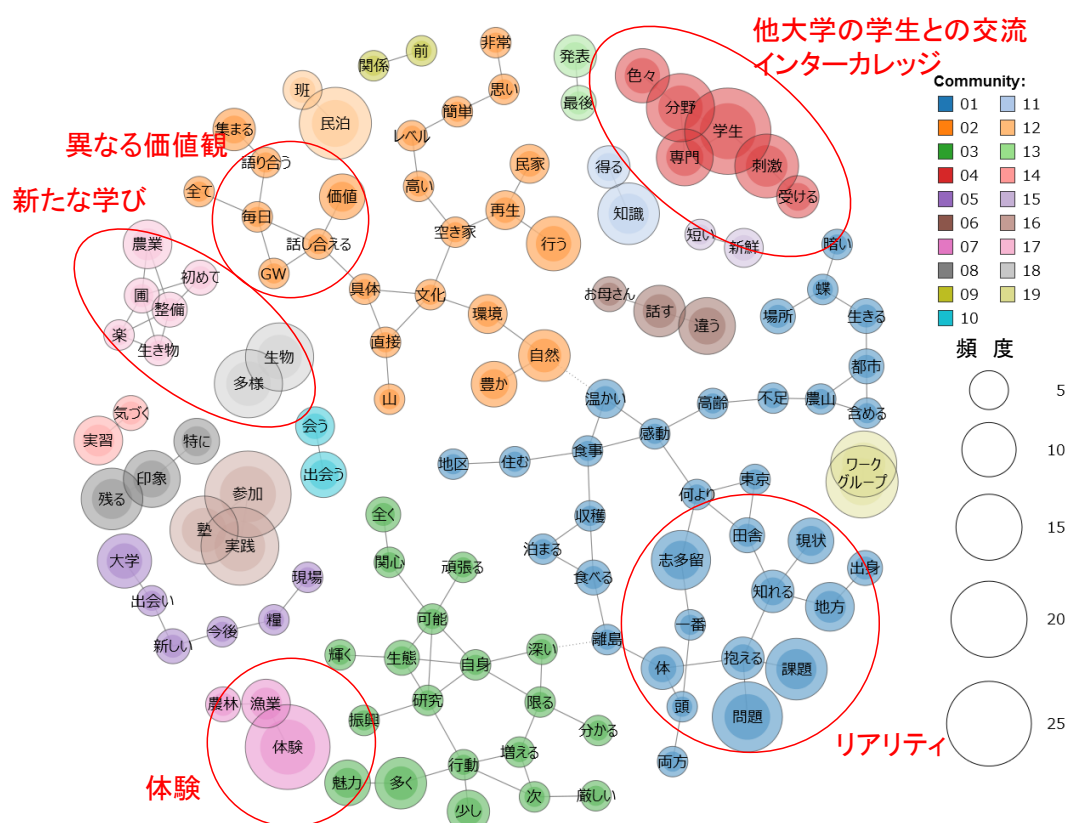


図1 実践塾での学びに関する共起ネットワーク分析図  
KHCoderにより2012～2017年度塾生の自由回答433文を用いて分析

### 3. 大人たちの学び

次に大人たちの学びについて気づいたことを紹介したい。

2017年9月、研究所主催で「写真ワークショップと地方創生」が対馬市内で開催された。当市の周知不足もあって参加者は少なかったものの、野田研一研究所運営委員による教養講義（風景論）、写真家・宮嶋康彦氏による技術講義（写真撮影や製本）と現地フィールドワークやディスカッションは、まるで大学のゼミ活動のようであった。

離島では高等教育やリカレント教育に触れる機会はほとんどない。ICTによって克服できそうなものであるが、離島のデジタル・デバイドは相当なものがある。通信速度は本土並みとは言えず、PCやネットユーザーも多くはない。スマートフォンで多様な情報を得られるが、情報過多となり、情報の動向や有用性等は、そうしたツールだけでは判断できない。やはり、様々な専門知や経験を持つ専門人材から直接講義を受け、交流することが不可欠である。

私は、市職員としてワークショップの準備やお手伝いだけでなく、講義を受講したり、写真撮影やディスカッションを行うなど、一受講者として参加した。野田先生の講義は本当にわくわくし、そのようなわくわく感を持てる大人の学びが、対馬に不足していると愕然とした。また、宮嶋氏による講義や指導は、人間の感性を磨く上で大変有意義なものであり、ふだん見慣れた対馬の風景を改めて見つめ直すことの重要性に気付かされた。また、製本技術（ルリユール）を直に見学することで、知の集積体としての本の見方・捉え方が変わった。

宮嶋氏によると、都会での製本教室は大変人気だという。このような学びは、大学や都市部でないとなかなか得られるものではない。離島だからと諦めるのではなく、域学連携を通じ、対馬に大学があるかのような環境づくりと大人への学び直しの機会創出を実現したいとこのワークショップに参加してみて強く感じた。

### 4. 子どもたちの学び

ESDによって、郷土愛や誇り意識が高まることは間違いない。ここで1つの取り組み事例を報告したい。長崎県立対馬高等学校の「ESD対馬学」である。

2015年にユネスコスクールに認定された対馬高等学校では、ユネスコスクールの理念に沿って、持続可能な地域づくりの担い手育成に取り組んでおり、2017年度より、新たな試みとして「ESD対馬学」をスタートさせた。

2017年度は、自然・歴史文化など、対馬に関するリレー講義とグループワークを踏まえ、市民の方々、福祉介護施設、長崎新聞社、対馬市などの協力を得ながら、ご高齢の方々28名に対するインタビューを行った。その成果は、新聞記事として編集し、文化祭等で発表した。

当市では、ESD対馬学による生徒たちの学習効果を評価するため、事前・事後のアンケート調査を行った。その結果、対馬の自然・歴史文化・産業・現状課題・地域づくりへの知識・理解が深まり、対馬への誇り意識が向上していることを確認することができた（図2）。

特に、生徒たちにとって、ご高齢の方々へのインタビューや新聞記事づくりはとても印象深く、対馬の今と昔を比較しながら、対馬の環境変化や課題をリアルに感じ取れたようである。また、インタビューや新聞づくりといったグループワークが、生徒たちのキャリア形成にプラスに働いたと感じられた。

予測困難な現代社会において、一人一人が未来の創り手としての力を身に付ける必要があり、そのために、今後ますます「主体的・対話的で深い学びの実現」が学習指導に求められていく（次期学習指導要領）。そうした中、ESD 対馬学は意義深く、今後も関係者と連携を強めながら、ESD 対馬学を継続・発展させていきたいと高校も当市も考えている。

ところで、郷土愛や誇り意識、郷土に対する学習意欲等が向上するだけでなく、U ターン意識は高まったのだろうか。高等教育機関が無く、若者の多様なニーズに見合う仕事が少ない離島や過疎地域では、高校卒業後、ほとんどの若者は生まれ育った地域を離れ、将来、U ターンし定住することはない。今でも地域づくりや環境保全を担う人財が不足しており、これから予想される人口急減によって、里地里山としての対馬の生物多様性・文化的多様性は急激に失われると危惧される。やはり、今の子どもたちの中から、将来、対馬にU ターンし、持続可能な島づくりの担い手・創り手として活躍する人財を生み出す必要がある。

ESD 対馬学でのアンケート結果を見ると、U ターン意識や対馬への貢献意識は大きくプラスに変化したわけではない。これは何故で、どうすればU ターンを促すことができるのだろうか。

その2点について大変興味深い研究がある。2016 年度対馬市島おこし実践塾に参加した東京大学大学院教育学研究科修士課程の眞岩哲史氏は、自身の修士論文として、対馬を事例に、離島地域の高校生のU ターン意識を研究した。その研究によると、郷土学習は確かにU ターン意識を高めるが、保護者の意識が高校生の意識を規定し、U ターンを促すためには、高校生や保護者を魅了する仕事づくりが必要不可欠であると提案している(眞岩 2018)。

この魅了する仕事とはどういうものであろうか。現代社会において、職業に対するニーズは多様化し、待遇も含めると、離島や過疎地域は都市部の仕事市場には到底対抗できない。特に離島や過疎地域で主流である農林漁業はいわゆる 3K、5K のイメージがつきまとい、そうした仕事を子どもたちには進めたくはないという保護者の意識が子どもたちの職業観に影響を与える。

一方、田園回帰が注目される中、農林漁業資源や地域資源の価値を見つめ直し、外部とのネットワークや都市部の視点等を活かしながら高付加価値を与え、6 次産業化等で起業し奮闘するケースは全国的に少なくない。対馬でも地域おこし協力隊（対馬では島おこし協働隊）の OBOG をはじめ、そうしたことにチャレンジしている。

彼ら彼女らはロールモデルとして子どもたちや保護者たちに刺激を与える存在である。「雇用が無いからふるさとに帰れない」。そうではなく、「自ら雇用を創り、持続可能な社会を拓く」というマインドが育成されることでU ターン意識が変化してくるのではなかろうか。現在、多くの現役隊員や OBOG 等が学校教育に関与している。子どもたちとの交流の中で、どうU ターン意識や職業観が変化するのか、中長期的な視点でのモニタリングを行ってみたいし、ESD 研究連携において研究所に期待を寄せる部分である。

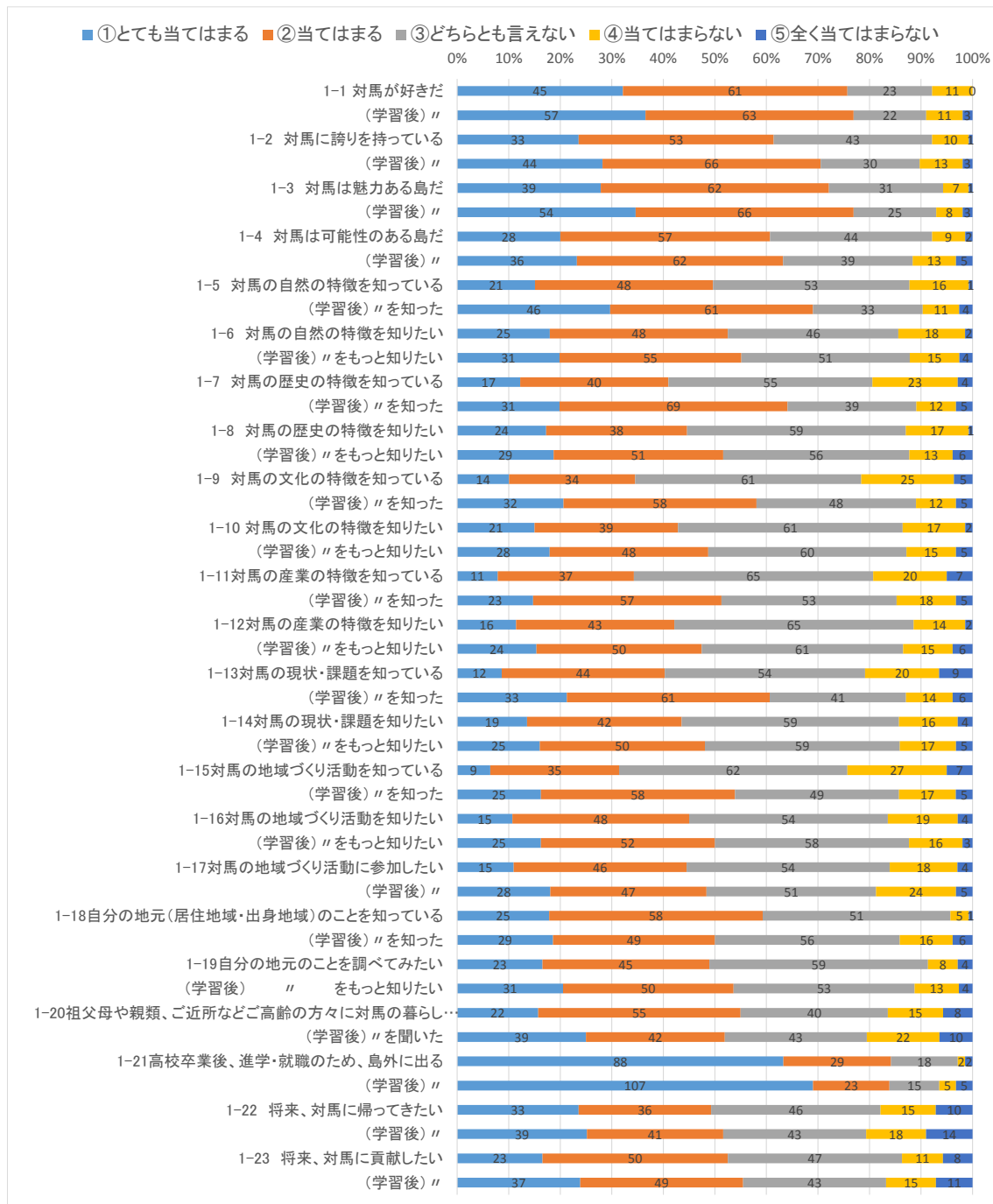


図2 ESD 対馬学の学習前・学習後の意識変化

学習前 N=140 (回収率 85.9%) , 学習後 N=156 名 (回収率 95.7%)

## 5. 教員の学び

最後に教員の学びについて述べたい。

2018 年 1 月、対馬市立巖原北小学校で開催された「ESD 人材養成事業研修会」に参加した。この研修会では、島内小中高で ESD の推進に取り組む学校の担任から、ESD の実践概要や学習の成果等が報告された。

この研修会に参加し、学校教育における ESD の教育効果をさらに高めるためのポイントとして以下が感じられた。

- ①ESD 学習における教員のテーマ設定、基礎科目との関連づけ
- ②ESD 学習における外部と学校との連携コーディネート
- ③小中高の教員同士の連携によるノウハウの共有とカリキュラムの系統化

この研修会には、島内小中高より数多くの教員が参加した。現場の多くの教員が ESD を手探りで実践する状況であるため、この研修会での実践発表は、参加教員にとって大きな刺激があったはずである。①について、教員のテーマ設定や学習の計画性によって、子どもたちの教育効果は大きく異なるであろうと発表を聞いて感じた修会で経験やノウハウを共有することで補えるのであろうが、研修会の継続開催は必要不可欠であると感じた。

また、ESD そのものへの教員の理解をどう促すかということを基本的課題として感じた。福岡教育大学でユネスコスクール支援や ESD 推進を担当する石丸哲史教授によると、2018 年度より同大学で ESD の授業を取り入れるという。教員養成課程において ESD に関する講義はどの大学においても義務化すべきではなかろうか。

②について、ESD を展開する際、学校区にどのような教育資源があり、それをどう組み合わせられるか、その情報収集や連絡調整を多忙な教員が担うには限界がある。特に小中高の人事異動が短期化する状況にあってはなおさらである。2017 年度においては研究所との連携により、(一社) MIT が学校教育における ESD 推進支援を実施した。こうした外部によるコーディネート支援は ESD を推進する上では必要不可欠と言える。

③について、当職は小中高の ESD サポートの中で、教育ステージ間（学年、小中高）で学習が系統化されておらず、学習効果を十分に高められていないと感じた。カリキュラムの系統化は、この研修会において教員側から課題として提起され、学校現場としても必要性を認識していることを知ることができた。カリキュラムの系統化や教員のノウハウの共有は、学校や教員単体でできるものではなく、そうした場づくりは学校外の機関の働きかけやコーディネートが必要だと感じた。

## 6. ESD を軸とした地域創生の展開

当市において、ESD の推進によって、様々なアクターが集い、学び、協働し、様々な変化が生じている。これは、研究所との ESD 研究連携をきっかけとした大きな変化・成果であろう。

阿部所長が ESD を「つながり教育」と表現しているが、様々なつながりと連携こそが、地域創生の展開や持続可能な社会の実現において重要であるように感じている。今、現代社会で求められる人財育成は、学校教育でのみできるものではないし、担うべきものではない。人の生涯にわたって施されるものであって、多様な主体の協働が必要不可欠である。そのつながりをもたらすのが ESD であろう。

次年度以降の取り組み課題としては、やはり ESD による中長期的な効果測定である。子どもたちや大学生、そして、大人や教員に至るまで、その意識や行動変化を追跡すること

を試みたい。

**【参考文献】**

前田剛，2017，「対馬市における地域創生と人づくり」阿部治編『ESD の地域創生力』阿部合同出版，28-44.

眞岩哲史，2018，『国境離島 対馬：若者と保護者の語る現実』東京大学大学院教育学研究科修士学位論文.

(まえだ・つよし 対馬市しまづくり推進部市民協働 交通対策課主任)